

「野口英世アフリカ賞」の運営の改善に向けた有識者懇談会（第1回）

議事概要

1. 日 時 令和2年7月16日（木）17:00～18:00

2. 場 所 総理大臣官邸2階大ホール

3. 出席者

（委員）

池上 清子 長崎大学大学院熱帯医学・グローバルヘルス研究科教授

黒川 清 政策研究大学院大学名誉教授

杉下 智彦 東京女子医科大学教授

ピーター・ピオット ロンドン大学衛生・熱帯医学大学院（英国）学長

ミアム・ウェレ モイ大学（ケニア）前総長

（政府側）

安倍 晋三 内閣総理大臣

菅 義偉 内閣官房長官

山崎 重孝 内閣府事務次官

林 伴子 内閣府大臣官房政策立案総括審議官

村田 優久夫 内閣府大臣官房企画調整課野口英世アフリカ賞担当室長

4. 議事概要

（1）安倍内閣総理大臣挨拶

- 委員の皆様におかれては、野口英世アフリカ賞に関する有識者懇談会の委員就任を、御快諾をいただき、また本日、会議に御参加いただいたこと、心から感謝申し上げます。特に、輝かしい功績を挙げられた、そして野口賞を受賞されたウェレ博士、そしてピオット博士のお二人に、この有識者懇談会に御参加いただくことは、誠に光栄なことである。
- 今から約1世紀前、野口英世博士は、感染症で苦しんでいる数多くの人々を救うために、ガーナに赴き、黄熱病の解明という大きな課題に立ち向かったが、志半ばで自らもその犠牲となった。
- 野口英世アフリカ賞は、この野口博士の精神を受け継ぎ、アフリカでの疾病の研究と公衆衛生の推進の2つの分野で顕著な功績を挙げた方を顕彰し、アフリカ、ひいては人類全体の保健・福祉の向上を目的として、2006年に創設された。当時、私は官房長官であったが、また総理大臣に就任した後も、野口賞の立ち上げに関与させていただいたところである。
- この賞は当初、TICAD（アフリカ開発会議）の日本開催に合わせ、約5年ごとに授与されてきた。その後、TICAD首脳会合が3年ごとにアフリカと、そして日本で相互に開催されることになったことを踏まえて、昨年の第3回授賞式で、私からこの賞の授与をTICADの開催

に合わせ3年ごとに行う旨、発表させていただいたところである。

- 今、世界は、新型コロナウイルス感染症の脅威に直面している。アフリカでも流行が拡大している。さらに、アフリカでは、エイズ・マラリア・結核等の多くの疾患によって、毎年数多くの犠牲者が出ている。
- 日本は長年にわたり、アフリカの保健医療分野への支援を行ってきた。私は、日本の総理としてこれまでアフリカを3度訪問して、またT I C A Dの議長を3度務め、アフリカの指導者の皆様、そして専門家、市民の皆様から生の声をお伺いしてきているところである。
- 今回のコロナ禍という未曾有の危機に際しても、日本は、アフリカを積極的に支援していく。次回、チュニジアで2022年に開催予定のT I C A D 8でも、この分野は重要なテーマとなるであろう。
- 野口英世アフリカ賞が、アフリカの自主性を尊重し、日本を含む国際社会の協力を推進するというT I C A Dの理念を体現する重要な象徴としてアフリカの未来を照らし続ける。私は、そう信じている。
- アフリカにおける保健医療の様々な課題の克服とコロナ後の新たな社会の創造に向け、アフリカと日本、そして世界は手を携えていかなければならない。その意味で、この賞の意義と重要性はますます高まっているといえると思う。
- 野口賞が3年ごとに授賞されることとなったことを契機として、この賞が世界の注目を一層集め、国際社会の資金と人材が、アフリカにおける疾病の研究及び公衆衛生の推進にますます注がれることになるよう、委員の皆様から幅広く忌憚のない御意見を賜りたいと思う。

(2) 出席者紹介

(3) 座長互選

- 互選の結果、黒川清政策研究大学院大学名誉教授が座長として選出された。
- 黒川座長から次のような挨拶があった。
 - ・ この「野口英世アフリカ賞」は3年ごとに授与されることになったが、大変うれしいことである。これを受賞された方々は、この賞のアンバサダーになっておられて、世界中に、こんなにすばらしい賞があるということを随分広げていただいている。
 - ・ 2008年、2013年、2019年の3回とも受賞者はすばらしい人ばかりで、ウェレ博士とグリーンウッド博士、ピオット博士とコウティーノ博士、前はムエンベ博士とオマスワ博士、皆さん本当にビッグアンバサダーになられて、本賞に対する皆さんの期待も高まっていると思う。
 - ・ 次回、第4回からは、この賞は3年に1回ということになり、引き続きすばらしい方を選んでいただけるよう、運営全体をよりよくすることができればと思っているので、委員の皆様には、ぜひ御協力いただければと思っている。

(4) 事務局説明

- 事務局から、本会合の議事の公表に関しては、会議終了後、配布資料を速やかにホームページで公表するとともに、議事概要を作成し、委員の確認を得たうえで、2週間後を目途にホームページで公表したいとの説明を行い、委員に了承された。
- 事務局から、資料2に沿って、有識者懇談会の議論の論点について説明を行った。

(5) 委員による議論

- 「(1) 公募方法の改善」について、次のような議論があった。

(仏語圏からの推薦が不振であること)

- ・ (ピオット委員) 仏語圏からの候補者が少ないことについて改善が必要。医学研究の分野で活躍する人たちは一般的に英語での読み書きに問題ないと思うが、医療活動の方は状況が異なると思う。草の根の活動で模範となるような人たちが表彰されることが大切であり、翻訳以上に、周知活動を強化することが大事。
- ・ (ウエレ委員) 広報活動を仏語圏で強化すべきというのはその通り。周知活動をもっとすべき。英語の推薦関連文書を仏語に翻訳する必要がある。
- ・ (池上委員) 医療活動分野はコミュニティベースの活動なので、フランス語でというのが大事だと思う。

(過去の選考過程で各部門の上位3位までに入った優秀な候補が、次の回の賞で推薦されていないこと)

- ・ (杉下委員) 過去にノミネートされているが受賞していない人が再び候補になるようにするメカニズムが必要。
- ・ (ピオット委員) 以前推薦されたが受賞できなかった人について、もう一度連絡し再度推薦してもらおうというのは、科学アカデミーなどでよくとられている方法であり、よい候補者のプールができる。

(候補者の推薦分野のミスマッチング)

- ・ (ピオット委員) 別の分野で推薦されてしまった場合、事務局の方で、適切な分野に振り替えるとよいと思う。
- ・ (ウエレ委員) 子委員会の二人の委員長の間で、ミスマッチがないか話し合うのがよいのではないか。二人の委員長が合意に達しなかった場合、親委員会の委員長に諮り、選考過程に入る前に、候補者が適切な分野に入っていることが合意されているようにすべき。

(個人候補と共同研究者・事業団体の扱い)

- ・ (ウエレ委員) 団体を推薦することも認めるべきだと思う。(事務局注: 医療活動分野は団体の推薦が可能)
- ・ (池上委員) 団体は数か国に及んで活動していることもあり、そのような団体が受賞すれば、活動の内容だけではなくて、広報を考えたときにも効果があると思う。

(推薦フォーム)

- ・ (杉下委員) 野口英世の功績が理解できる簡単で分かりやすい資料を英語のみならず仏語、アラビア語、ポルトガル語にして推薦要項に載せるとよい。推薦する場合に野口英世の功績を参考にするので、功績が直ちに理解できるようにすることが必要。
- ・ (杉下委員) 推薦フォームがウェブサイトに取り込まれ、電子データで送信して推薦できるようなシステムを作るとよい。手間が避けられると思う。(事務局注: 医学研究分野では採用済み)
- ・ (黒川座長) 今の時代はネットを使うのが大事なので、ウェブサイトを使い推薦しやすくするのはとても大事。

(COVID-19の影響を考慮した推薦)

- ・ (杉下委員) COVID-19の影響がアフリカでも非常に大きい。こういう新しい感染症に立ち向かっている研究者や現場の医療活動家がたくさんアフリカにもいると思う。こういう人々を積極的に探して、例えばこれに詳しいWHO/AFRO、アフリカCDC、各国の大使館のような機関等を活用して、実際に今COVID-19対応で頑張っている者に光が当たるような公募があるとよい。

○ 「(2) 選考委員・プロセス・基準」について、次のような議論があった。

(選考委員の出身母体の問題)

- ・ (ピオット委員) WHO が医療活動分野の事務局となるのは留保したい。WHO は政治的な組織であり委員会に入ると影響力が出てしまうので望ましくないと思う。

(各分野の選考委員会から提出される推薦者に順位が付されていることの是非)

- ・ (ピオット委員) 親委員会が最上位にあり意思決定をする機関であるので、各分野の子委員会では上位3人(件)程度を順位をつけずに受賞に値する候補として推薦するのがよい。順位付けしないことが各委員会のやる気を喪失させるということにはならないと思う。

(対象分野の新たなスコープ)

- ・ (杉下委員) これまでの受賞者を見ると、感染症、プライマリヘルスケアなどクラシック

な分野での受賞者が多い。データヘルスの分野や病院経営、保険、大勢の人が裨益する新しい研究や活動が増えている。スコープを広げ、さらにグローバルな目で見ている人にも光をあてるようにしたい。

- ・（ピオット委員）今の世界、グローバルヘルスというのは、単にバイオメディカルということではなく、いろいろな領域の人たちを推薦する必要があるということが新型コロナをみてもよくわかる。選考委員会もいろんな領域の者を推薦することが必要である。

○「（３）広報の強化」について、次のような議論があった。

（日本のアフリカへの貢献の広報の重要性）

- ・（ウェレ委員）この賞の広報活動をもっと強化する必要がある。その際に、日本のアフリカへの貢献という観点での広報強化が重要である。野口賞は日本の対アフリカ貢献を日本国内とアフリカの双方に広く知らしめるよい機会である。同時に、受賞者を介して国内で広報活動することも重要。（2011年に東日本大震災後自費で福島を訪問し、交流した経験を紹介しつつ、）受賞者と日本人がいろいろと相互に働きかけることで、この賞を通して、またその他の手段を通して、日本がアフリカにどれだけ貢献をしているのかということをも日本国内にも広報でき、是非行うべきである。

（ヤング・ノグチ賞の創設）

- ・（杉下委員）これまで業績があった人に賞を与えるのに加えて若い世代向けのヤング・ノグチ賞を創設してはどうか。賞金は高額である必要はないと思う。次回の会合までに、提案を考えてみたい。
- ・（池上委員）今後野口賞の授賞は3年ごとになる。野口賞受賞の間の2年間にヤング・ノグチ賞を授与したらどうか。登竜門という位置づけがいいのではないか。
- ・（ウェレ委員）良いアイデアだと思う。若い人たちがコミュニティに貢献している人に光をあてることになる。また、この野口英世賞を通じて日本のビジネスマン、あるいは日本の組織がプログラムを支援する。そのプログラムは受賞者とも関係あるかもしれない。受賞者自身ではなくて、アフリカの開発、またアフリカと日本の関係増進に貢献する人たちということも考える。
- ・（黒川座長）ジュニア・スカラシップというような奨学金もよい。次のT I C A Dはチュニジアで開催されるので、各国2人ずつ程度、将来野口賞の受賞者になれそうな若者を招待してはどうか。
- ・（ウェレ委員）私も今でも若い人たちと協力している。若者は指導しないと一体何をしたらいいかわからないということがある。ジュニア・スカラシップ、あるいはジュニアプライズでも何でもよいが、そういった形で若者を支援することは非常によい。また、日本で本当に感

銘を受けたのは、日本人の規律であった。また同時に、日本人は本当に仕事に献身的に取り組み、他人を蔑まない。野口賞を通じて日本とアフリカの相互の働きかけがあれば、日本とアフリカの専門家のパートナーシップの中にこの規律の文化やアフリカへの献身が醸成される。これは野口賞の受賞者と連携したプログラムやプロジェクトに、日本とアフリカの専門家がアフリカの若者や若年層とともに参加することで達成される。日本政府、経済界、組織にも、こうしたプログラムやプロジェクトに協力し、後押ししてほしい。日本人のポジティブな姿勢をアフリカに伝えていきたい。

(6) 今後の進め方について

- 事務局から、第2回会合は8月20日に開催し、引き続き議論を行いたい旨の説明があった。